

南朝宋時代における明堂創建と謝莊の明堂歌

南澤, 良彦
九州大学

<https://doi.org/10.15017/18219>

出版情報：中国哲学論集. 33, pp.1-22, 2007-12-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

南朝宋時代における明堂創建と謝莊の明堂歌

南 澤 良 彦

序

南朝宋王朝時代（四二〇～四七九）は、禮制面では漢代以来の中原的伝統を曳きずる東晉王朝と比較的自由で独自の文化を開花させた齊梁王朝との狭間にあって、試行錯誤を繰り返す過渡期の時代であった。中原回復を至上命題として建康を臨時首都以上に見ない東晉王朝は、その地に宇宙論的中心の象徴である禮制建築を建設することに熱心でなかった。とりわけ經學上の問題から漢代以来紛糾を極めた明堂は、東晉時代造営されることはなかつた。¹

建康に明堂が創建されたのは、劉宋も第四代皇帝世祖孝武帝の時代になってからである。この劉宋明堂で奏でられる祭祀歌（明堂歌）は、陳郡陽夏の謝氏の一員である謝莊に委ねられた。魏晉南北朝時代きつての名家である謝氏一族の中でも謝莊は、拔群の才能を文学や音楽の藝術分野に有しており、彼の作製した明堂歌は技巧の限りを尽くした傑作となる。²

本論考は、南朝宋王朝時代における明堂創建に関する議論と謝莊の作製した明堂歌とを検討し、当時の明堂とその祭祀対象との概要について解明せんとするものである。

一 明堂の創建

南朝宋時代において明堂が建てられたのは、世祖孝武帝の大明五年（四六一）五月のことである。

①五月、起明堂於國學南丙巳之地。〔南史〕本紀卷二宋本紀中第二孝武帝、六四頁³

それは同年四月庚子に発せられた詔勅による。

②孝武大明五年四月庚子、詔曰、「昔文德在周、明堂崇祀、高烈惟漢、汶邑斯尊。所以職祭罔饗、氣令斯正、鴻名稱首、濟世飛聲。朕皇考太祖文皇帝功耀洞元、聖靈昭俗、內穆四門、仁濟羣品、外薄八荒、威憚殊俗、南腦勁越、西髓剛戎。裁禮興稼穡之根、張樂協四氣之紀。匡飾墳序、引無題之外、旌延寶臣、盡盛德之範。訓深劬農、政高刑厝。萬物隸通、百神薦祉。動協天度、下洽地德。故精緯上靈、動殖下瑞、諸侯軌道、河濰海夷。朕仰憑洪烈、入子萬姓、皇天降祐、迄將一紀。思奉揚休德、永播無窮。便可詳考姬典、經始明堂、宗祀先靈、式配上帝、誠敬克展、幽顯咸秩。惟懷永遠、感慕崩心。」

有司奏、「伏尋明堂辟雍、制無定文、經記參差、傳說乖舛。名儒通哲、各事所見、或以爲名異實同、或以爲名實皆異。自漢暨晉、莫之能辨。周書云、清廟明堂路寢同制。鄭玄注禮、義生於斯。諸儒又云明堂在國之陽、丙巳之地、三里之內。至於室宇堂个、戶牖達向、世代湮緬、難得該詳。晉侍中裴頠、西都碩學、考詳前載、未能制定。以爲尊祖配天、其義明著、廟宇之制、理據未分、直可爲殿、以崇嚴祀。其餘雜碎、一皆除之。參詳鄭玄之注、差有準據、裴頠之奏、竊謂可安。國學之南、地實丙巳、爽塏平暢、足以營建。其墻宇規範、宜擬則太廟、唯十有二間、以應期數。依漢汶上圖儀、設五帝位、太祖文皇帝對饗。祭皇天上帝、雖爲差降、至於三載恭祀、理不容異。自郊祖宮、亦宜共日。禮記郊以特牲、詩稱明堂羊牛、吉蠲雖同、質文殊典。且郊有燔柴、堂無禋燎、

則鼎俎彝簋、一依廟禮。班行百司、搜材簡工、權置起部尚書、將作大匠、量物商程、剋今秋繕立。」
乃依顧議、但作大殿屋雕畫而已、無古三十六戶七十二牖之制。〔宋書〕卷十六志第六禮三、四三三〜四三四頁
〔宋孝武大明五年（四六一）四月庚子、詔に曰く、「昔文德周に在りては、明堂祀を崇くし、高烈惟れ漢なれば、汶邑斯れ尊し。所以に職祭魯（うが）ひ罔くして、氣斯れ正しから令め、鴻名首を稱して、濟世聲を飛ばす。朕の皇考太祖文皇帝は功耀洞元して、聖靈昭俗す。内は四門を穆として、仁羣品を濟ひ、外は八荒を薄しとして、威殊俗を憺にす。南腦は越より勁く、西髓は戎より剛けし。禮を裁して稼穡の根を興し、樂を張つて四氣の紀を協す。墳序を匡飾して、無題の外に引き、寶臣を旌延して、盛徳の範を盡す。訓は深く農を勸め、政は高く刑厝く。萬物隸通して、百神薦祉す。動は天度に協して、下地徳に沿ふ。故に精は上靈を緯して、動は下瑞を殖やす。諸侯道に軌り、河漣海夷す。朕洪烈に仰憑して、萬姓に入子すれば、皇天祐を降して、將に一紀ならんとするに迄る。休徳を奉揚して、永く無窮に播かんことを思ふ。便ち姬典を詳考して、明堂を經始し、先靈を祭祀して、式て上帝に配し、誠敬克く展きて、幽顯咸な秩たらんとすべし。惟れ永遠を懷き、感じて崩心を慕ふ」と。

有司奏すらく、「伏して尋ぬるに明堂辟雍、制に定文無く、經記參差し、傳説乖舛す。名儒通哲、各々の見る所を事とし、或は以て名異なるも實同じと爲し、或は以て名實皆異なると爲す。漢自り晉に暨ぶも、之れを能く辨ずる莫し。周の書〔周禮〕匠人〕に、清廟・明堂・路寢は制を同じくす、と云ふ。鄭玄禮に注して、義斯より生ず。諸儒又云く、明堂は國の陽、丙巳之地、三里の内在り、と。室宇堂个、戶牖の達向に至りては、世代湮緬して、該詳するを得難し。晉の侍中裴頠、西都の碩學なるも、前載を考詳して、未だ制定する能はず。以て祖を尊んで天に配すは、其の義明著なるも、廟宇の制、理據未だ分ならざれば、直だ殿を爲りて、以て嚴祀を崇くせん。其の餘の雜碎、一に皆之を除くと爲さん。鄭玄の注を參詳すれば、差（さ）準據有り、裴頠の奏、竊かに安んずべしと謂へり。國學の南は、地實に丙巳、爽塏平暢にして、以て營建するに足らん。其の墻宇の規範、宜しく太廟に擬則すべく、唯だ十有二間は、以て期數に應ず。漢の汶上の圖儀に依りて、五帝の位を設け、

太祖文皇帝對饗す。皇天上帝を祭るよりは、差降を爲すと雖も、三載の恭祀に至りては、理として異を容れず。郊自ら宮に徂くに、亦宜しく日を共にすべし。禮記は郊するに特性を以てし、詩は明堂羊牛と稱し、吉蠲同じと雖も、質文典を殊にす。且か郊に燔柴有るも、堂に禋燎無ければ、則ち鼎俎彝簋、一に廟禮に依る。百司を班行して、材を搜し工を簡び、權りに起部尚書・將作大匠を置きて、物を量り程を商り、剋く今秋に繕立せられんことを」と。

乃ち顧の議に依る。但だ大殿を作りて屋に畫を雕るのみ、古の三十六戸七十二牖の制無し。）

孝武帝の詔勅は明堂創建の理念を述べたものである。すなわち、自己の父である太祖文帝が高い功德を有し、天地の意思に沿った政治を行って調和ある社会を実現したことを称揚し、その偉業を継承して無窮に伝えてゆく爲に、明堂を創建して、「先靈」を宗祀して「上帝」に配し、「誠敬」を示して「幽顯」両方の世界の神靈たち皆を秩序づけると宣言する。

この詔書を受けて有司は、歴代、明堂の制度には絶対的に依拠できる決まりはなく、文献も学者たちの意見もまちまちであると弁解した上で、暫定的なプランを提示する。すなわち、明堂は国学の南丙巳の方角に建設する。墻宇の大きさは太廟に準拠して十二間として一年十二ヶ月の數に対応させる。漢の泰山汶上の明堂の見取図に依拠して「五帝」の座位を設置して太祖文皇帝を對饗させる。皇天上帝の祭祀よりはランクは下がるけれども、三載恭祀に至っては違いがあつてよい道理は無い。南郊から明堂に行き、同じ日に祭祀を行うべし。『禮記』（郊特性）に依れば郊祭には特性を用い、『詩經』（周頌清廟之什我將）は明堂では羊や牛が祭祀に用いられると謡う。郊には火を使う燔柴の儀式があるが、明堂にはかがり火を焚いて煙りをあげる儀式は無く、鼎俎彝簋といった彝器はすべて太廟の儀礼と同様にする。

以上のプランを発表した有司は、役人を総動員して建設に取りかかり、今秋中に完成させると約束して上奏文を終える。

二 明堂の祭祀

大明五年の秋九月には次のような上奏が爲されて、曖昧なままであつた明堂儀式のディテールが検討される。

③大明五年九月甲子、有司奏、「南郊祭用三牛。廟四時祠六室用二牛。明堂肇建、祠五帝、太祖文皇帝配、未詳祭用幾牛。」

太學博士司馬興之議、「案鄭玄注禮記大傳稱、『孝經郊祀后稷以配天、配靈威仰也。宗祀文王於明堂、以配上帝、配五帝也。』夫五帝司方、位殊功一、牲牢之用、理無差降。太祖文皇帝躬成天地、則道兼覆載、左右羣生、則化洽四氣。祖宗之稱、不足彰無窮之美、金石之音、未能播勳烈之盛。故明堂聿修、聖心所以昭玄極、汎配宗廟、先儒所以得禮情。愚管所見、謂宜用六牛。」

博士虞蘇議、「祀帝之名雖五、而所生之實常一。五德之帝、迭有休王、各有所司、故有五室。宗祀所主、要隨其王而饗焉。主一配一、合用二牛。」

祠部郎顏奐議、「祀之爲義、並五帝以爲言。帝雖云五、牲牢之用、謂不應過郊祭廟祀。宜用二牛。」〔『宋書』志卷十六志第六禮三、四三四〜四三五頁〕

（大明五年（四六一）九月甲子、有司奏すらく、「南郊の祭三牛を用ゐる。廟の四時の祠六室二牛を用ゐる。明堂の肇めて建つるや、五帝を祠り、太祖文皇帝を配するに、未だ祭に幾牛を用ゐるかを詳らかにせず。」

太學博士司馬興之議すらく、「案ずるに鄭玄禮記大傳に注して稱すらく、『孝經の後稷を郊祀して、以て天に配するは、靈威仰に配するなり。文王を明堂に宗祀して、以て上帝に配するは、五帝に配するなり』と。夫れ五帝は方を司り、位殊なるも功は一、牲牢の用、理として差降無し。太祖文皇帝躬から天地と成れば、則ち道覆載を兼ね、左右羣生すれば、則ち化四氣を洽す。祖・宗の稱、無窮の美を彰するに足らず、金石の音、未だ勳烈の盛を播く能はず。故に明堂聿めて修むるや、聖心の玄極を昭む所以、汎く宗廟に配するや、先儒の禮情を

得る所以なり。愚管見る所、宜しく六牛を用ゐるべしと謂へり」と。

博士虞胤議すらく、「帝を祀るの名五と雖も、而れども生ずる所の實常に一なり。五徳の帝、迭に休王有り、各をの司る所有り、故に五室有り。宗祀主とする所、要らず其の王に随ひて焉に饗す。主一配一、合せて二牛を用ゐよ」と。

祠部郎顔奐議すらく、「祀の義爲る、五帝を並べて以て言と爲す。帝五と云ふと雖も、牲牢の用、應に郊祭・廟祀を過ぐべからずと謂へり。宜しく二牛を用ゐるべし」と。

大明五年四月の有司上奏(②)で、明堂には五帝を祀り、太祖文皇帝を配祀すること、犠牲には羊牛を用いることは決定していた。ここでは犠牲の牛の数が問われる。南郊の祭は三牛を用い、廟(太廟)の四時の祠は六室二牛を用いる。では明堂の祭には幾牛を用いるべきなのか。

太學博士司馬興之の回答は六牛を用いるべしという驚くべきものであった。『禮記』大傳の「禮、不王不禘。王者禘其祖之所自出、以其祖配之。」の鄭玄注に依拠して「五帝」を靈威仰等の五方天帝と解釈し、配祀される文帝と併せて各個に一牛づつ合計六牛を用いよと言うのだ。文帝は「裁禮興稼穡之根、張樂協四氣之紀。(中略)萬物棟通、百神薦祉。動協天度、下洽地徳。(大明五年四月詔勅)」「躬成天地、則道兼覆載、左右羣生、則化洽四氣。(大明五年九月司馬興之議)」という卓越した帝王であり、その文帝の偉大性を誇示するためにも、郊祭に供される犠牲の牛の数を倍する六牛なる数が望まれたのであろう。

博士虞胤の回答は二牛であった。五帝を祀るといい、名称は「五」帝だが、(感生帝として)帝王を生ずる実体である神は常に(各帝王ごとに)その中のただ一柱のみである。五帝といっても五帝が同時に活動しているわけではない。五帝が順番に活動期に入り、一帝が活動している間は他の四帝は休止期なのである。したがって、祭祀に当たっては、その中の活動期に入っている帝に対して文帝を配し、各一牛計二牛を捧げるのである。

祠部郎顔奐の意見も二牛である。明堂の祭祀は「五帝を祀る」と定義されるが、「五帝」ワンセットを祀るのであつ

て、「五」柱の帝を個々に祀るわけではない。だから五帝は帝の数は五だけれども（五つで一つと見なして）郊祭の三牛、廟祀の二牛を越えるほど過大評価せずともよく、二牛で十分だと判断したのである。

三 明堂の五帝

大明六年（四六二）正月辛卯いよいよ南朝宋王朝の明堂は運用に供される。

④六年春正月己丑、湘州刺史建安王休仁加平南將軍。辛卯、車駕親祠南郊。是日、又宗祀明堂。大赦天下。

〔宋書〕本紀卷六本紀第六孝武帝、一二九頁）

⑤六年春正月辛卯、祀南郊。是日、又宗祀文皇帝于明堂、以配上帝。大赦。〔南史〕本紀卷二宋本紀中第二孝武帝、六四頁）

⑥六年正月、南郊還、世祖親奉明堂、祠祭五時之帝、以文皇帝配、是用鄭玄議也。官有其注。〔宋書〕志卷十六

志第六禮三、四三四頁）

⑦（大明）八年（四六四）春正月辛巳、祀南郊。是日、還宗祀文帝于明堂。〔南史〕本紀卷二宋本紀中第二孝武帝、六七頁）

右の④⑤⑥に共通する事実は、大明六年正月・文帝が・南郊祭祀の後（ひきつづいて）・明堂を宗祀したことである。祭祀対象が『南史』（⑤）では「上帝」、『宋書』禮志三（⑥）では「五時之帝」となっている。注意すべきは、『宋書』禮志の「是用鄭玄議也。官有其注。」という箇所である。「上帝」が「五帝」なのは大明五年四月有司奏で了解済みであるが、「五帝」即「五時之帝」とするのは、なるほど鄭玄の議を採用して始めて言えることである。「官有其注」とは「士官に鄭玄注がある」でなく、「公文書館にそのときの記録が残っている」の意であろう。とすれば宋

王朝は明堂祭祀儀礼については鄭玄説を受容したのだ。

ここで鄭玄の説を見ておこう。右に見た司馬興之の議に見える『禮記』大傳本文「禮、不王不禘。王者禘其祖之所自出、以其祖配之。」(禮、王たらずば禘せず。王者其の祖の自りて出づる所を禘し、其の祖を以て之に配す。)」の鄭玄注とは次のようなものである。

⑧凡大祭曰禘。自、由也。大祭其先祖所由生謂郊、祀天也。王者之先祖、皆感大微五帝之精以生。蒼則靈威仰、赤則赤熛怒、黃則含樞紐、白則白招拒、黑則汁光紀。

皆用正歲之正月郊祭之、蓋特尊焉。孝經曰、郊祀后稷以配天、配靈威仰也。宗祀文王於明堂、以配上帝、汎配五帝也。『十三經注疏』阮元刻本『禮記注疏』卷三十四、一葉

(凡そ大祭を禘と曰ふ。自は、由なり。大いに其の先祖の由りて生ずる所を祭るを郊と謂ひ、天を祀るなり。王者の先祖は、皆大微五帝の精に感じて以て生ず。蒼は則ち靈威仰、赤は則ち赤熛怒、黃は則ち含樞紐、白は則ち白招拒、黒は則ち汁光紀なり。)

皆正歳の正月を用て之を郊祭するは、蓋し特に尊べばなり。『孝經』(聖治章)に「后稷を郊祀して以て天に配す」と曰ふは、靈威仰に配すなり。「文王を明堂に宗祀して以て上帝に配す」とは、汎く五帝に配すなり。)

いつたい大微五帝(之精)すなわち、蒼(帝)靈威仰、赤(帝)赤熛怒、黃(帝)含樞紐、白(帝)白招拒、黒(帝)汁光紀とは何者であるのか。

そもそも太微とは星座の名である。『史記』天官書では南宮朱鳥星座の中にあり、「三光(日・月・五星)の廷」。南宮朱鳥には別に六星からなる諸侯星座があり、その中の五星を五帝坐だとする。

太微を「五帝の廷」とするのは後漢の張衡(七八〇―一三九)である。その論文「靈憲」(『續漢書』天文志上劉昭注所引)には「地有山嶽、以宣其氣、精種爲星。星也者、體生於地、精成於天、列居錯跖、各有迫屬。紫宮爲皇極之居、

太微爲五帝之廷。明堂之房、大角有席、天市有坐。蒼龍連蟠於左、白虎猛據於右、朱雀奮翼於前、靈龜圈首於後、黃神軒轅於中。六擾既畜、而狼蛇魚鼈罔有不具。在野象物、在朝象官、在人象事、於是備矣。」とある。太微、明堂、五方神が登場するが、それぞれの関係は未詳であり、靈威仰等の名は見えない。

鄭玄に先立って靈威仰等の名が見えるのは緯書である。一例を挙げれば、『春秋左傳正義』桓公傳五年所引の『春秋緯文耀鉤』は、「太微宮有五帝坐星。蒼帝其名曰靈威仰、赤帝曰赤熛怒、黃帝曰含樞紐、白帝曰白招拒、黑帝曰汁光紀。」と云う。

また、『晉書』天文志上は、西晉の武帝の頃に太史令陳卓の整理した記録として次の様に記す。

⑨中宮。

I 北極五星、鉤陳六星、皆在紫宮中。北極、北辰最尊者也、其紐星、天之樞也。天運無窮、三光迭耀、而極星不移、故曰「居其所而星共之」。第一星主月、太子也。第二星主日、帝王也。亦太乙之坐、謂最赤明者也。第三星主五星、庶子也。中星不明、主不用事。右星不明、太子憂。鉤陳、後宮也、大帝之正妃也、大帝之常居也。北四星曰女御宮、八十一御妻之象也。鉤陳口中一星曰天皇大帝、其神曰耀魄寶、主御萬靈、執萬神圖。抱北極四星曰四輔、所以輔佐北極而出度授政也。大帝上九星曰華蓋、所以覆蔽大帝之坐也。蓋下九星曰杠、蓋之柄也。華蓋下五星曰五帝內坐、設敍順帝所居也。客星犯紫宮中坐、大臣犯主。華蓋杠旁六星曰六甲、可以分陰陽而配節候、故在帝旁、所以布政教而授農時也。極東一星曰柱下史、主記過。左右史、此之象也。柱史北一星曰女史、婦人之微者、主傳漏、故漢有侍史。傳舍九星在華蓋上、近河、賓客之館、主胡人入中國。客星守之、備姦使、亦曰胡兵起。傳舍南河中五星曰造父、御官也、一曰司馬、或曰伯樂。星亡、馬大貴。其西河中九星如鉤狀、曰鉤星、直則地動。天一星在紫宮門右星南、天帝之神也、主戰鬪、知人吉凶者也。太一星在天一南、相近、亦天帝神也、主使十六神、知風雨水旱、兵革饑饉、疾疫災害所在之國也。

II 紫宮垣十五星、其西蕃七、東蕃八、在北斗北。一曰紫微、大帝之坐也、天子之常居也、主命主度也。一曰長垣、

一曰天營、一曰旗星、爲蕃衛、備蕃臣也。宮闕兵起、旗星直、天子出、自將宮中兵。東垣下五星曰天柱、建政教、懸圖法。門內東南維五星曰尚書、主納言、夙夜諮謀。龍作納言、此之象也。尚書西二星曰陰德、陽德、主周急振撫。宮門左星內二星曰大理、主平刑斷獄也。門外六星曰天床、主寢舍、解息燕休。西南角外二星曰內廚、主六宮之內飲食、主后妃夫人與太子宴飲。東北維外六星曰天廚、主盛饌。

III 北斗七星在太微北、七政之樞機、陰陽之元本也。故運乎天中、而臨制四方、以建四時、而均五行也。魁四星爲璇璣、杓三星爲玉衡。又曰、斗爲人君之象、號令之主也。又爲帝車、取乎運動之義也。又魁第一星曰天樞、二曰璇、三曰璣、四曰權、五曰玉衡、六曰開陽、七曰搖光。一至四爲魁、五至七爲杓。樞爲天、璣爲地、璣爲人、權爲時、玉衡爲音、開陽爲律、搖光爲星。石氏云、「第一曰正星、主陽德、天子之象也。二曰法星、主陰刑、女主之位也。三曰令星、主中禍。四曰伐星、主天理、伐無道。五曰殺星、主中央、助四旁、殺有罪。六曰危星、主天倉五穀。七曰部星、亦曰應星、主兵。」又云、「一主天、二主地、三主火、四主水、五主土、六主木、七主金。」又曰、「一主秦、二主楚、三主梁、四主吳、五主燕、六主趙、七主齊。」

(中略)

IV 太微、天子庭也、五帝之坐也、十二諸侯府也。其外蕃、九卿也。一曰太微爲衡。衡、主平也。又爲天庭、理法平辭、監升授德、列宿受符、諸神考節、舒情稽疑也。南蕃中二星間曰端門。東曰左執法、廷尉之象也。西曰右執法、御史大夫之象也。執法、所以舉刺凶姦者也。左執法之東、左掖門也。右執法之西、右掖門也。東蕃四星、南第一星曰上相、其北、東太陽門也。第二星曰次相、其北、中華東門也。第三星曰次將、其北、東太陽門也。第四星曰上將、所謂四輔也。西蕃四星、南第一星曰上將、其北、西太陽門也。第二星曰次將、其北、中華西門也。第三星曰次相、其北、西太陽門也。第四星曰上相、亦曰四輔也。東西蕃有芒及動搖者、諸侯謀天子也。執法移、刑罰尤急。月、五星入太微、軌道、吉。其所犯中坐、成刑。

其西南角外三星曰明堂、天子布政之宮。明堂西三星曰靈臺、觀臺也、主觀雲物、察符瑞、候災變也。左執法東北一星曰謁者、主贊賓客也。謁者東北三星曰三公內坐、朝會之所居也。三公北三星曰九卿內坐、主治萬事。九

卿西五星曰内五諸侯、内侍天子、不之國也。辟雍之禮得、則太微、諸侯明。

V 黃帝坐在太微中、含樞紐之神也。天子動得天度、止得地意、從容中道、則太微五帝坐明以光。黃帝坐不明、人主求賢士以輔法、不然則奪勢。四帝星俠黃帝坐、東方蒼帝、靈威仰之神也。南方赤帝、赤熛怒之神也。西方白帝、白招矩之神也。北方黑帝、叶光紀之神也。〔晉書〕志卷十一志第一天文上中宮、二八九〜二九二頁)

陳卓は「甘(德)・石(申夫)・巫咸三家著す所の星圖を總べて、大凡二百八十三官、一千四百六十四星、以て定紀と爲〔晉書〕志卷十一志第一天文上、二八八〜二八九頁)」したと言うが、緯書の影響が濃厚であるのに疑問の余地はない。緯書の具体的なイメージは、それを深く信奉した鄭玄の権威もあつて、魏晉時代の中国人の宇宙觀に定着したと思われる。南朝宋時代孝武帝期に明堂を創建するに当たつて前提とされていたのはこのような世界觀・宇宙イメージであつたのだ。大明五年九月甲子の太學博士司馬興之たちの議論はこの事実を踏まえて検討されなくてはならない。なお、右の『晉書』天文志(⑨)の第V段落で傍点を附した「動得天度、止得地意」の二句が大明五年四月詔書(②)の第一段落で傍点を施した二句「動協天度、下洽地德」に酷似していることを指摘しておきたい。「天子動けば天度を得、止まれば地意を得、從容として中道すれば、則ち太微の五帝の坐明らかとなり以て光やく」、晉の太史令陳卓の『星圖』にあるこの一節を踏まえているからには、やはり宋の明堂は創建時から靈威仰等の太微五帝を祭祀する場として想定されていたと見なしてよからう。

四 明堂歌の構成

孝武帝は明堂創建時に、謝莊(四二二〜四六六、本傳は『宋書』卷八十五)に命じて明堂祭祀に使用する祭祀の歌——明堂歌を作製させた。その歌詞の全文は、『宋書』樂志二に収載される。

⑪宋明堂歌

謝莊造

地紐謐、乾樞回。華蓋動、紫微開。旌蔽日、車若雲。駕六氣、乘網緼。曄帝京、輝天邑。聖祖降、五靈集。構瑤阼、聳珠簾。漢拂幌、月棲檐。舞綴暢、鍾石融。駐飛景、鬱行風。懋粢盛、潔牲脞。百禮肅、羣司虔。皇德遠、大孝昌。貫九幽、洞三光。神之安、解玉鑾。景福至、萬宇歡。

(地紐謐かなるも、乾樞回る。華蓋動き、紫微開く。旌は日を蔽ひ、車は雲の若し。六氣に駕し、網緼に乗る。帝京を曄やかせ、天邑を輝やかす。聖祖降り、五靈集る。瑤阼を構え、珠簾を聳やかす。漢幌を拂い、月檐に棲む。舞綴暢ほり、鍾石融ほおる。飛景を駐どめ、行風を鬱さく。粢盛を懋かんにし、牲脞を潔ぎよくす。百禮肅しむ、羣司虔しむ。皇德遠ほく、大孝昌なり。九幽を貫ぬき、三光を洞ぬく。神の安きや、玉鑾を解く。景福至り、萬宇歡ぶ。)

右迎神歌詩。

〈依漢郊祀迎神、三言、四句一轉韻。〉

雍臺辨朔、澤宮練辰。潔火夕照、明水朝陳。六瑚賁室、八羽華庭。昭事先聖、懷滯上靈。肆夏式敬、升歌發德。永固鴻基、以綏萬國。

(雍臺朔を辨じ、澤宮辰を練る。潔火夕べに照り、明水朝に陳す。六瑚室を賁り、八羽庭を華やかにす。昭は先聖に事へ、懷は上靈を滯らす。肆夏式で敬し、升歌德を發す。永く鴻基を固くし、以て萬國を綏んず。)

右登歌詞。

舊四言。

維天爲大、維聖祖是則。辰居萬宇、綴旒下國。內靈八輔、外光四瀛。蒿宮仰蓋、日館希旌。複殿留景、重檐結風。刮楹接緯、達嚮承虹。設業設虞、在王庭。肇禋祀、克配乎靈。我將我享、維孟之春。以孝以敬、以立我烝民。(維れ天大と爲し、維れ聖祖是れ則る。辰萬宇に居り、旒を下國に綴る。内八輔を靈とし、外四瀛を光やかす。蒿宮蓋を仰ぎ、日館旌を希む。複殿景を留め、重檐風を結ぶ。刮楹緯に接し、達嚮虹を承く。業を設け虞を設

けて、王庭に在り。禋祀を肇て、克く靈に配す。我將し我享して、維れ孟の春。孝を以てし敬を以てして、以て我が蒸民を立つ。）

右歌太祖文皇帝詞。

依周頌體。

參映夕、駟照晨。靈乘震、司青春。雁將向、桐始蕤。柔風舞、暄光遲。萌動達、萬品新。潤無際、澤無垠。

（參は夕べに映じ、駟は晨に照る。靈は震に乗り、青春を司る。雁將に向はんとし、桐始めて蕤す。柔風舞ひ、暄光遲し。萌動達し、萬品新たななり。潤に際無く、澤に垠無し。）

右歌青帝詞。

三言、依木數。

龍精初見大火中。朱光北至圭景同。帝位在離實司衡。水雨方降木槿榮。庶物盛長成殷阜。恩覃四溟被九有。

（龍精初め大火中に見ゆ。朱光北至して圭景同じくす。帝位離に在りて實に衡を司る。水雨方に降りて木槿榮ゆ。庶物盛長して成殷阜す。恩四溟に覃びて九有を被ふ。）

右歌赤帝辭。

七言、依火數。

履建宅中宇、司繩御四方。裁化遍寒燠、布政周炎涼。景麗條可結、霜明冰可折。凱風扇朱辰、白雲流素節。分至乘結晷、啓閉集恒度。帝運緝萬有、皇靈澄國步。

（履は宅を中宇に建て、繩を司りて四方を御す。裁化寒燠を遍くし、布政炎涼を周くす。景麗の條は結ぶべく、霜明の冰は折るべし。凱風朱辰に扇ぎ、白雲素節に流る。分至結晷に乘じ、啓閉恒度に集まる。帝運萬有を緝ぎ、皇靈國歩を澄ます。）

右歌黃帝辭。

五言、依土數。

百川如鏡、天地爽且明。雲冲氣舉、德盛在素精。木葉初下、洞庭始揚波。夜光徹地、翻霜照懸河。庶類收成、歲功行欲寧。浹地奉渥、罄宇承秋靈。

(百川鏡の如く、天地爽にして且つ明。雲の冲氣舉がり、徳盛んに素精に在り。木葉初めて下り、洞庭始めて波を揚ぐ。夜光地を徹し、翻霜懸河を照らす。庶類收成し、歳功行欲寧し。浹地奉渥して、罄宇秋靈を承く。)

右歌白帝辭。

九言、依金數。

歲既晏、日方馳。靈乘坎、徳司規。玄雲合、晦鳥路。白雲繁、亘天涯。雷在地、時未光。飭國典、閉關梁。四節遍、萬物殿。福九域、祚八鄉。晨晷促、夕漏延。太陰極、微陽宣。鵲將巢、冰已解。氣滯水、風動泉。(歳既晏く、日方に馳せん。靈坎に乗り、徳規を司る。玄雲合し、晦鳥路す。白雲繁く、天涯に亘る。雷地在り、時未だ光らず。國典を飭し、關梁を閉づ。四節遍し、萬物殿す。九域を福し、八郷を祚す。晨晷促がし、夕漏延ぶ。太陰極まり、微陽宣ぶ。鵲將に巢せんとし、冰已に解く。氣水を滯し、風泉を動かす。)

右歌黑帝辭。

六言、依水數。

藴禮容、餘樂度。靈方留、景欲暮。開九重、肅五達。鳳參差、龍已秣。雲既動、河既梁。萬里照、四空香。神之車、歸清都。璇庭寂、玉殿虛。睿化凝、孝風熾。顧靈心、結皇思。(藴禮容り、餘樂度る。靈方に留まり、景暮れんと欲す。九重を開き、五達を肅す。鳳參差し、龍已に秣ぶ。雲既に動き、河既に梁す。萬里照らし、四空香ほる。神の車、清都に歸る。璇庭寂とし、玉殿虚し。睿化凝り、孝風熾くる。靈心を顧み、皇思を結ぶ。)

右送神歌辭。〈漢郊祀送神、亦三言。〉(『宋書』卷二十志第十樂二、五六九〜五七一頁)

『宋書』樂志は右の通りに歌詞の本文だけを収載するだけで、それ以上の説明はない。しかしながら、「迎神歌詩」

(皇帝) 登歌詞―歌太祖文皇帝詞―歌青帝詞―歌赤帝辭―歌黃帝辭―歌白帝辭―歌黑帝辭―送神歌辭」と言う配列は、「明堂に神を迎え、皇帝が出迎えに登り、配祀する皇祖を紹介し、お迎えした神々(五帝)を歓待し、そしてお見送りする」という至つてスムーズな一連の流れを形成している。実際の明堂の祭祀儀式がこの順序で行われたと見て大過無いだろう。

この明堂歌は、宋代のみならず南朝を代表する詩人である謝莊の製作に係る極めてユニークな作品である。歌詞(詩、辭)の内容の検討に入る前に、その独創的な形式に言及しておこう。一見するば分かるように、謝莊の明堂歌は歌ごとに句數や一句あたりの字數が異なる。字數の根拠は題名に添えられた「三言、木數」「七言、火數」等の詞書きから推測できるとおり、基本的には五行説にある。しかしながら、五行説だけでは説明できない規則性があり、謎解きは容易ではない。

『南齊書』樂志で試みられた解釈は次の通りである。

⑩明堂歌辭、祠五帝。漢郊祀歌皆四言。

宋孝武使謝莊造辭。莊依五行數、木數用三、火數用七、土數用五、金數用九、水數用六。案鴻範五行、一曰水、二曰火、三曰木、四曰金、五曰土。月令木數八、火數七、土數五、金數九、水數六。蔡邕云、「東方有木三土五、故數八。南方有火二土五、故數七。西方有金四土五、故數九。北方有水一土五、故數六。」

又納音數、一言得土、三言得火、五言得水、七言得金、九言得木。若依鴻範木數用三、則應水一火二金四也。若依月令金九水六、則應木八火七也。當以鴻範一二之數、言不成文、故有取捨、而使兩義竝違、未詳以數立言、爲何依據也。周頌我將祀文王、言皆四、其一句五、一句七。

謝莊歌宋太祖亦無定句。〔南齊書〕志卷十一志第三樂、一七二頁)

(明堂歌辭、五帝を祠る。漢の郊祀歌皆四言なり、宋の孝武、謝莊をして辭を造らしむ、莊五行の數に依り、木數は三を用ゐ、火數は七を用ゐ、土數は五を用ゐ、金數は九を用ゐ、水數は六を用ゐる。案ずるに、鴻範に、

「五行、一を水と曰ひ、二を火と曰ひ、三に木と曰ひ、四に金と曰ひ、五に土と曰ふ。」と。月令に、「木數八、火數七、土數五、金數九、水數六。」と。蔡邕云く、「東方に木三土五有り、故に數八。南方に火二土五有り、故に數七。西方に金四土五有り、故に數九。北方に水一土五有り、故に數六。」と。

又納音の數には、一言土を得、三言火を得、五言水を得、七言金を得、九言木を得たり。若し鴻範の木數三を用ゐるに依れば、則ち應に水は一・火は二・金四なるべし。若し月令の金を九・水を六とするに依れば、則ち應に木は八・火は七なるべし。當に鴻範一二の數、言は文を成さざるを以てが故に取捨有るべし、而るに兩義をして並びに違はしむ、未だ數を以て言を立つるは何にか依據すと爲すを詳らかにせざるなり。周頌「我將祀文王」、言皆四、其の一句は五、一句は七。

謝莊宋太祖を歌ふは亦定句無し。）

『南齊書』樂志の選者（梁・蕭子顯、四八九く五三七）の解答は方向性は間違つていない。しかしながら、「依鴻範木數用三、則應水一火二金四也。若依月令金九水六、則應木八火七也。當以鴻範一二之數、言不成文、故有取捨、而使兩義竝違、未詳以數立言爲何依據也。」というのは、五行の數に生數と成數とがあることを考慮に入れば当たらない批判である。

『禮記』月令篇「其數八」の鄭玄注に「數者五行佐、天地生物成物之次也。易曰、天一地二天三地四天五地六天七地八天九地十（說卦傳）。而五行自水始。火次之、木次之、金次之、土爲後。木生數三、成數八。但言八者、舉其成數。」とある。すなわち、五行の數には「生數」と「成數」との二つがあり、木は生數三成數八、火は生數二成數七、土は生數五成數十、金は生數四成數九、水は生數一成數六（『禮記』月令篇鄭玄注による）なのだ。謝莊は成數を基本とし、木だけは生數を採用したのである。¹⁾

五 明堂歌の神神

明堂歌の歌詞内容の検討に入ろう。『宋書』樂志の構成通り見てゆくと、明堂で歌われるのは、まず「迎神歌」である。解釈すれば

大地を天とつなぐ紐である八紘は静謐なままだが、天の門の回転軸は回転したのだ。華蓋の星々が動き、紫微垣の星座がその門を開いたのである。降り来たる天帝の神の車列は、旌指物は太陽を覆い被すほどであり、車は雲のようである。天神の車列は陰陽風雨晦明の六氣に駕し、網縕たる氣に乗る。天神の降臨を承けて皇帝の京城はかがやき、天子の首都はかがやく。その地へと王朝の聖祖の神明が降り、五天帝の神霊が集い来たる。瑤の彤を構え、珠の簾を聳えさせる。天漢が車の幌に接触し、月がのき先に位置している。地上では舞綴が練り広げられ、鍾石による音楽が行き渡っている。天神の降臨の車列は、流れ星をも駐留させ、吹きすさぶ風をもストップさせる。地上では、供物の糝盛を盛大にし、犠牲の牲脍をきれいに清める。百禮の者どもは肅然とし、羣司たちも虔虔とする。聖祖の皇徳は永遠で、子孫たちの大孝は昌盛を極める。それらは地下の死者の世界である九幽をも貫き、天上の日月星の三光さえもつらぬきさす。神霊たちは安らぎ、玉の鑾駕の動きを停止させる。地上に景福至り、萬宇が歓喜する。

描出された、天界の紫微垣の開門、天帝の車列の出座、天界から地上に降臨するその様など、一見して『晉書』天文志(⑨)の記述と符合する箇所が多いことに気づくであろう。華蓋の下五星は「五帝内座(五帝のくつろぎの場所、太微の五帝座は別物で執務の場所である)」であり、紫微は天皇大帝の坐である。五帝の車は中宮にある天子五星からなる五車と呼ばれるガレージに停められている。この星座は「天子が靈臺の禮を得れば則ち明るく常有り」(『晉書』天文志、二九七頁)。靈臺は明堂と一体の関係にある禮制建築物である。歌はまた、地上における歓迎の様子、天神

と宋王朝の聖祖の神靈とが無事に地上へ到着した様子を活写する。

迎神歌の次に歌われるのは、皇帝が明堂に升る際の登歌と呼ばれる歌である。明堂での祭祀儀礼の荘嚴さを高める歌詞である。⁵⁾

次は配祀する太祖文皇帝を歌う。専ら文帝の業績の偉大性を宇宙論的スケールで象徴的に表現している。

ついで青帝を始めとする五帝を歌う詞が列挙される。それらの形式が独創的なのは前節で見た。五行説に基づいて、成数・生数を一句あたりの文字数としているのだ。だから青帝以下の五帝は当然五行の帝（神）なのである。また、迎神歌の世界観・宇宙イメージは『晉書』天文志を髣髴とさせるものであった。ならば、謝莊の明堂歌に歌われる五帝は『晉書』天文志に見える太微の五帝すなわち、東方蒼（青）帝靈威仰・南方赤帝赤熛怒・中央黃帝含樞紐・西方白帝白招矩・北方黒帝叶（汁）⁶⁾光紀なのであろうか。

謝莊の明堂歌の中の歌青帝詞・歌赤帝辭・歌黃帝辭・歌白帝辭・歌黒帝辭に、靈威仰・赤熛怒・含樞紐・白招矩・汁光紀の名は見えない。では、謝莊の五帝は靈威仰たちではないのであろうか。「歌青帝詞」以下の歌詞を検討して、謝莊が青帝以下の五帝を如何なるものと想定しているのかを確認しておこう。

「歌青帝詞」の第三、四句「靈乘震、司青春」、「歌赤帝辭」の第三句「帝位在離實司衡」「歌黒帝辭」の第三、四句の「靈乘坎、徳司規」にはいづれも易の卦「震」「坎」「離」の語が使われており、五行説ではそれぞれの五行の徳に合致する。もともと五帝が五行の神であることは、その歌詞の一句あたり語数がすでに象徴する自明のことである。

注目すべきは、「帝位在離實司衡」の「衡」である。「衡」は星である。北斗七星の第五星、玉衡だというのだ。

『史記』天官書「北斗七星、所謂璇、璣、玉衡以齊七政」。の『素隠』に引く緯書『春秋運斗樞』に、「斗、第一天樞、第二旋、第三璣、第四權、第五衡、第六開陽、第七搖光。第一至第四爲魁、第五至第七爲標、合而爲斗。」とある。帝（赤帝）は座位が離（南方）にあつて衡を司するというのだ。

この句の前の二句「龍精初見大火中。朱光北至圭景同」も、天界の事柄である。「大火」は、『晉書』天文志上「十二次度數」に「自氏五度至尾九度爲大火、於辰在卯、宋之分野、屬豫州。」とあるように、「卯」（東）の方角の星

(の領域)である。「龍精」が初めて東の空に現れた時、朱光が北至して圭と景とが同じになる。すなわち、真つ赤な太陽が天の最も高い地点に到達して日時計とその影との長さが同じになる(影が無くなる)というのだ。

「歌黃帝辭」の第九、十句「分至乘結晷。啓閉集恒度」も天界の事柄である。分(春分秋分)至(夏至冬至)が正確な時計で計算され、啓(立春立夏)閉(立秋立冬)は恒久不変の物差しで測定される。原文に忠実に解釈すれば、日時計が正確であれば分至の方から接近してき、度が恒常であれば啓閉の方から集まってくるのだ。晷や度を使うのは黃帝である。イニシアティブは黃帝の側にあるのである。中央に座位を占め四方を統御するから、四時を支配できるのだ。

謝莊の歌詞(辭)に見える五帝は、四時の安定した運行を極めて重視する、五行の神であった。四時の正確な順行が精密な天文觀測儀器に依拠しているとするのが、謝莊の觀念の最大の特徴である。

天文觀測儀器と言えば、宋代には劃期的な盛事があつた。渾天儀の建造である。

①宋文帝以元嘉十三年(四三六)、詔太史更造渾儀。太史令錢樂之、依案舊說、采效儀象、鑄銅爲之。五分爲一度、徑六尺八分少、周一丈八尺二寸六分少。地在天內、不動。立黃赤二道之規、南北二極之規、布列二十八宿、北斗極星。置日月五星於黃道上。爲之杠軸、以象天運。昏明中星、與天相符。

梁末、置於文德殿前。至如斯制、以爲渾儀、儀則內闕衡管。以爲渾象、而地不在外。是參兩法、別爲一體。就器用而求、猶渾象之流、外內天地之狀、不失其位也。

吳時又有葛衡、明達天官、能爲機巧。改作渾天、使地居于天中。以機動之、天動而地止、以上應晷度、則樂之所放述也。〔隋書〕志卷十九志第十四天文上渾天象、五一九頁)

錢樂之が鑄造した儀器は觀測機器である渾天儀でなく、デモンストラーション用の渾天象である。説明によれば、それは黃赤二道の規と南北二極の規とを備えていたが、内部は衡管を欠いていた。研究者の理解では、規とは目盛り

の付いた円環、衡は覗いて（実際の）天象を観測する望筒、もしくは渾天象の回転を支えるパイプである。鄭玄は玉衡を玉製の渾天儀だと認識している。右の機器は観測に不可欠な衡を欠いていたために渾天儀でなく、渾天象だと断定されたのである。⁸⁾

元嘉十三年は謝莊十六歳の時である。当時の科学技術の粋を集めて建造されたこの機器が、謝莊の世界観宇宙イメージに深甚な影響を及ぼしたことは想像に難くない。規や衡はここでは人工の機器の部品であるが、渾天象が宇宙モデルであることを考慮に入れれば、宇宙そのものにも規や衡はあり、規とは黄赤二道と南北二極そのものであり、衡とは鄭玄の説に依拠すれば宇宙そのものである。右の歌詞（辭）の中の「司衡」「司規」はあるいはその様な意味とらえるべきかも知れない。

謝莊の明堂歌は「送神歌辭」を以て終わる。「奥深い式典が続き、音楽がまだ奏でられる夕暮れ時、名残を惜しむ神神の上、九重の天は再び開き、鳳凰や龍が舞い飛ぶ中、神の車は星界の清都への帰還の途につく」、歌詞通りの厳粛な雰囲気の中、祭祀は終焉を迎える。

結局謝莊の明堂歌には靈威仰等の名は見えなかった。ただし、以上の分析によって、謝莊の観念では、五帝とはアルカイックな神神ではまったくなく、最先端の機器を駆使してシステムティックに季節の循環プログラムを遂行する、黄帝を中心とする主宰グループであり、それにも拘わらず／＼それ故に、念入りの技巧を凝らした詩歌を作製して懇ろに称賛するに値する畏敬の対象であることが判明した。

結語

南朝宋時代の明堂は、鄭玄のプランに依拠して祭祀の対象を始めとする儀礼の詳細を決定した。祭祀の対象は上帝であり、鄭玄の言う上帝とは五帝、すなわち東方青帝靈威仰・南方赤帝赤熛怒・中央黄帝含樞紐・西方白帝白招矩・北方黑帝汁光紀の五方天帝に他ならない。明堂創建を命じる皇帝もその詔書を受ける有司たちも、そのことを前提に

明堂のディテールについて議論を行った。

謝莊も明堂歌を作製するに当たりその認識は共有していた。実名こそ出さないまでも、天上の星界からお迎えするのは靈威仰等の五方天帝なのである。そのことは歌詞から如実に窺える。謝莊は巧妙に措辞を工夫して、生々しい実名を隠したまま、靈威仰等であるところの五帝の姿形と振る舞いとをヴィヴィッドに描写することに成功した。五行説の思想的側面や典拠など歌詞の語彙自体の表現するイメージの他、五行説に基づく文字数などを含む言葉遊びを含む修辭的技巧や、謝莊の通曉していた音韻や声律上の知識を駆使して、謝莊の明堂歌は稀に見る傑作に仕上がった。

この明堂歌に歌われた五帝はもはや、『禮記』月令篇本文から想像されるような茫漠たる太古の神神ではなく、完璧な機器を駆使し、それをもって宇宙の運行をも完璧にさせる力を發揮する能吏然とした神神なのである。そしてこの五帝の特性は、西晉の陳卓の著した『星圖』に明確に記述されているものであり、後漢の緯書とそれに基づく鄭玄の説とを思想的ベースにして、それらを包摂して極めて体系的且つ実際の観測に裏打ちされた最先端の科学的知見なのである。

南朝宋王朝のもと江南の地建康に創建された明堂とその祭祀対象との概要は、斯くの如きものであった。禮制上重要な機能を果たす明堂は、經學の学的伝統を踏まえながらも、時代ごとに意匠を更新していくのである。南朝の明堂は謝莊という稀有な天才を得て、すこぶるモダンな装いでデビューを飾ったのだ。

〔注〕

- (1) 魏晉南北朝時代の禮制については、金子修一『中国古代皇帝祭祀の研究』（岩波書店、二〇〇六年四月、東京）第一章「魏晉南北朝時代における郊祀・宗廟の制度」、第五章「魏晉南朝における郊祀・宗廟の運用」第六章「北朝における郊祀・宗廟の運用」を参照。

- (2) 謝莊についての研究は、文学分野では、佐藤正光「元嘉時代の謝莊」『松浦智久博士追悼記年中国古典文学論集』研文出版、二〇〇六年三月、東京を、明堂歌については、南澤良彦「南朝の明堂について——謝莊の明堂歌を中心として——」

(平成一四)一六年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(2) 課題番号一四三二〇〇〇九、『六朝隋唐精神史の研究』研究成果報告書(論考篇)、平成一七年三月)を参照。

(3) 本論考では正史は中華書局排印の評点本二十四史を底本とし、そのページ数を示す。

(4) 謝荘の明堂歌の字句数の問題について詳しくは、注(2) 所掲南澤論文を参照。

(5) この歌の措辞は、『宋書』樂志一(五四一〜五四五頁)に記録される、宋王朝前期における二郊宗廟の祭祀に使用される樂舞の議論を踏まえている。

(6) 『晉書』天文志は「叶光紀」とするが、緯書は「汁光紀」とする。以下は『晉書』からの引用以外では「汁光紀」と表記する。

(7) 「歌皇帝辭」は水敷に依って六言というのだから、第二句とすべきかもしれない。

(8) 魏晉南北朝時代の渾天儀と渾天象については、杜石然・范楚玉・陳美東・金秋鵬・周世徳・曹婉如『中国科学技術史』(東京大学出版会、一九九七年二月、東京)第五章を参照。

(9) 渾天象が宇宙モデルであることは、南澤良彦「張衡の宇宙論とその政治的側面」『東方学』第八十九輯、一九九五年一月)を参照。

(10) 謝荘が音韻や声律に通暁していたことは、『宋書』卷六十九范曄傳および『詩品』序を参照。